

宮沢賢治「種山ヶ原」と夏目漱石『夢十夜』：「櫨の木」、「篝火」、「民俗学」

頼, 怡真
九州大学大学院比較社会文化学府：特別研究員

<https://doi.org/10.15017/1901736>

出版情報：九大日文．29，pp.39-54，2017-03-31．九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

宮沢賢治「種山ヶ原」と夏目漱石『夢十夜』——「櫓の木」、「篝火」、「民俗学」

LAL
Yichan
頼 怡 真

一、夏目漱石と宮沢賢治の文学の共通性

本稿においては、日本近代文学において重要な影響力のある夏目漱石テクストと宮沢賢治テクストの関係性について論じた。このようなキャノンは研究され尽くされた感があるが、漱石と賢治を比較することで新しい読解の可能性が開かれるだろう。漱石テクストと賢治テクストの共通性については、先行研究でもたびたび論じられてきた。恩田逸夫は、賢治「よだかの星」の「市蔵」という名前が、漱石『彼岸過迄』（明治四五年一月二日から四月二九日まで「朝日新聞」に連載）の高等遊民「須永市蔵」から取られているのではないかと指摘している^①。続橋達雄は、賢治の童話「ガドルフの百合」（生前未発表）の内容が『夢十夜』の「第一夜」の内容と重なっていることから、漱石から刺激を受けて、賢治が「おれの恋は、いまあの百合の花なのだ」という言葉を書いたのではないかと指摘している^②。これ以外にも、漱石と賢治のテクストの類似性を指摘することができる。高橋世織によると、「フランドン農学校の豚」（生前未発表）では、

豚語を話して、人間の言語を理解する豚の視点から見た人間心理や欲望が洞察されており、漱石「吾輩は猫である」（『ホトトギス』、明治三八年一〜八月）の猫を豚に変更したようなテクストとして読める。また、賢治「どんぐりと山猫」（『注目の多い料理店』所収、杜陵出版社／東京光原社、大正一三年二月）では、一枚の「おかしなはがき」が金田一郎に届けられるところから物語が始まっており、『吾輩は猫である』の金田家の猫が想起される^③。本稿では、漱石『夢十夜』（『朝日新聞』明治四一年七月二五日〜八月五日）と賢治「種山ヶ原」（生前未発表）を取り上げて、両テクストに共通して見られる「櫓の木」の描写と、そのテクストが下敷きになっている民俗学的な要素を分析し、文学者がどのようにして伝説や民俗学的なものを理解し、それを作り変えて小説化していったのかを論じていく。

前述の高橋は、漱石と賢治のテクストにおける民俗学的な傾向について論じている。高橋の指摘によれば、「西欧近代小説の理念を学び具現化したかに思われがちな漱石にさえ、江戸のローカル・カラーが下地に塗り込められている」のであり、『夢十夜』の「第四夜」における「大きな丸い輪」の中の、「今に其の手拭が蛇になるから、見て居ろう。見て居ろう」（『漱石全集 第十二巻』一一頁と繰り返す「爺さん」の話は、「さしずめ、『嘉十』の手拭が「環のまんなか」で生き物のような小道具と化す、『夢物語』Ⅱ『鹿踊りのはじまり』で復活・変容をとげたのではないか」という^④。また、「第五夜」については、相原和邦によれば、この話には「こんな晩」型の民話や歌舞伎な

どに見られる伝統的な要素があり、更に、柳田国男の「野鳥雜記」に登場する類話と極めてよく似ているという⁵⁾。それを踏まえて鈴木覺雄は、「第五夜」には「天探女」伝説と「馬蹄石」伝説の要素が認められ、「あまのじゃく」が鶏の鳴き真似をして何かの妨害をするというプロットが、昔話や説話に類出するパターンであることを指摘している。⁶⁾ここで重要なのは、高橋が指摘しているように、漱石のテクストに「江戸のローカル・カラー」が見い出せるということである。つまり、漱石のテクストには、民俗学が登場する近代以前の説話や昔話、国学などとの関係性があるのだ。このような点から、本稿では、漱石と賢治のテクストにおける民俗学的なものを比較する際に、次のような点に注意を払っている。まずそれは、これまで賢治テクストが、柳田国男の民俗学と比較されることがあるのは、賢治テクストの下地となるイーハトーブ (EHATOBU、岩手) と柳田『遠野物語』(聚精堂、明治四三年六月) との間に、テクストの地政学的な類似性、及び創作時期の類似性があるという点である。一方で、漱石テクストが執筆されたのは、いわゆる柳田国男の柳田学や折口信夫の折口学といった民俗学が登場する以前の時代である。漱石『夢十夜』の場合、「江戸のローカル・カラー」という言葉は、民俗学の源流とも見なされる国学や本草学を指すのではあるまいか(一方で、柳田の民俗学は「新国学」とも呼ばれている)。つまり、漱石の「第五夜」が柳田の「野鳥雜記」に似ていることは、のちに発見されたことであり、漱石テクストのコンテクストに柳田学があるというわけではない。

本稿の主旨に戻って見てみよう。高橋は漱石と賢治のテクストにおける民俗学的な傾向が類似していると指摘しているだけではない。高橋によれば、『夢十夜』の「第五夜」と賢治「榎ノ木大学士の野宿」(生前未発表)⁷⁾の題目にも「榎ノ木」という言葉があるのは偶然の一致だったとしても、「第十夜」で「パナマ帽」の庄太郎が「豚に舐められる」場面と、賢治「榎ノ木大学士の野宿」の「野宿第三夜」で主人公が恐竜に舐められる場面において「喰はれるぞ」と観念して眼が覚める」点は、両テクストの共通性を示唆しており、「何よりも生理的、存在論的恐怖感のレヴエルで両者は通底してい」⁸⁾るという。このように、高橋は、漱石の「第五夜」と賢治「榎ノ木大学士の野宿」に共通して「櫓の木」が登場していることを指摘しているが、単語レベルの偶然的な類似性を指摘するにとどまっている。本稿では、賢治のもう一つの童話「種山ヶ原」に注目し、漱石『夢十夜』の「第五夜」と合わせて比較することで、二つのテクストにいくつかの共通性を見い出していく。その際に本稿が重要視しているのは、共通して「櫓の木」という言葉が登場するという単語レベルの共通性を示すだけでなく、単語それ自体が持つ「死亡」や「墜落」といった意味が両テクストで同じように見いだされることを示すことである。

賢治「種山ヶ原」は、のちに「風の又三郎」(生前未発表、昭和六八年成立と推定)の一部分として転用されることもあり、先行研究では過渡的な習作として見られる傾向があるが、このテクストにのみ「剣舞」という、もう一つ重要なテーマがあるこ

とを看過することはできない。「種山ヶ原」には、主人公の達二が「あの昔からの」「剣舞」を踊る場面がある。

（あゝ。此の夏休み中で、一番面白かったのは、おぢいさんと一緒に上の原へ仔馬を連れに行ったのと、もう一つはどうしても剣舞だ。鶏の黒い尾を飾った頭巾をかぶり、あの昔からの赤い陣羽織を着た。それから硬い板を入れた袴をはき、脚絆や草（鞋）をきりつとむすんで、種山剣舞連と大きく書いた沢山の提灯に囲まれて、みんなと町へ踊りに行ったのだ。ダー、ダー、ダースコ、ダー、ダー。踊ったぞ、踊ったぞ。町のまっ赤な門火の中で、刀をぎらぎらやらかしたんだ。櫓夫さんと一諸（ママ）諸になった時などは、刀がほんたうにカチカチぶつかった位だ。（『新校本 第八巻』九七頁）

ここでいう「剣舞」とは、東北に伝わる民俗舞踊のことで、小松和彦によれば、賢治が生まれ育った岩手県内には、主として「神楽」（大磐神樂や岳神樂など山伏系の神楽）や「田楽」（田植踊りや春田打ちなど）、「風流」（剣舞、鹿踊り、盆踊りなど）といった種類の「剣舞」があるという。賢治の詩集『春と修羅』に収録されている「原体剣舞連」は、賢治が大正十一年八月三〇日から三日にかけて、種山ヶ原に地質調査に向かった際に、当時の田原村原体（現在の奥州市江刺区田原）で剣舞を見た経験に基づいて執筆された作品である。賢治は、弦月の下で鳥の黒尾をつけ

た頭巾をかぶって舞う舞い手の姿に、伝説で語られている東北地方に跋扈したという鬼あるいは反逆者、悪路王退治の様子を思い起こしたという⁹⁾。島尾敏雄によれば、梁川（北上山系の裾に展開した盆地）からほど近いあたりに悪路王の子のものと伝えられる人首丸や大岳丸の塚もあり、「悪路王のことは記録にはあらわれないがつい阿弓流為のことに思いは走ってしまう。鹿島神宮には悪路王の首の像がある」¹⁰⁾という。一方で、川村湊は、賢治の「剣舞」意識に、「アイヌ」文化の痕跡のようなもの¹¹⁾があり、「まつろわぬ蝦夷（えみし）の悪路王といわれたアルティの悲劇を念頭に置いていたのではないかと指摘している」⁹⁾。

つまり、「種山ヶ原」というテクストの背景に潜む重要なテーマとして、伝説上の「悪路王」とその敵である征夷大將軍の争いがあり、「種山ヶ原」の冒頭にある「種山といふのは北山山地のまん中の高原」という箇所における「種山」が「悪路王」伝説の発生の舞台でもある。そして「悪路王」の惨めな最期を描いた「種山ヶ原」と、「何でも余程古い事で、神代に近い昔と思はれ」、「自分」が敵の大將に捕まえられ、「生擒」となる漱石『夢十夜』の「第五夜」のプロットが極めてよく似ていることがわかる。そして、両テクストで共通して描かれているのは、「敗北」というテーマである。また、「種山ヶ原」は「達二の夢」の内容であり、『夢十夜』の「第五夜」には「こんな夢があった」とあるように、両テクストとも「夢」の形式で戦いの物語が描かれているのである。

二、漱石『夢十夜』の第五夜と宮沢賢治「種山ヶ原」における「櫓の木」「櫓夫」をめぐる表象

「敗北」というテーマが潜んでいる漱石「第五夜」と賢治「種山ヶ原」においてはまた、「敗北」にまつわる「墜落」と「死」のイメージが描かれている。そして、それらを結びつけているのが「櫓の木」である。まず、賢治「種山ヶ原」における「櫓の木」の表象に注目しよう。

そして達二は、牛と、原の入口に着きました。大きな櫓の木の下に、兄さんの縄で編んだ袋が投げ出され、沢山の草たばがあちこちにくちがつてゐました。

(中略)

達二はあんまり見つともなかったので、目を瞑つて横を向きました。そして急いで引つ返しました。小さな黒い道が、いきなり草の中に出て来ました。それは沢山の馬の蹄の痕で出来上つてゐたのです。達二は、夢中で、短い笑ひ声をあげて、その道をぐんぐん歩きました。

けれども、たよりのないことは、みちのはづが五寸ぐらゐになつたり、又三尺ぐらゐに変つたり、おまけに何だぐるつと廻つてゐるやうに思はれました。そして、たうとう、大きなてっぺんの焼けた栗の木の前まで来た時、ぼんやり幾つにも岐れてしまひました。

(中略)

マ
〔一〕間違つて原を向ふ側へ下りれば、もうおらは死ぬばかりだ」と達二は、半分思ふ様に半分つぶやくやうにしました。それから叫びました。(『新校本 第八巻』一〇二頁)

この引用箇所では、達二は兄と牛と一緒に「櫓の木」のある場所に辿り着き、兄が牛と達二を残して一人で向こうに行つてゐる間に、急に牛が逃げ出したため、その牛を追つていくうちに、達二は「沢山の馬の蹄の痕で出来上つてゐた」黒い道に辿り着くことになる。その黒い道を堂々巡りのようにして歩いていくと、黒い家が見えてくるが、実はそれが黒い岩であつたことに気付く。ここで達二は「間違つて原を向ふ側へ下りれば、もうおらは死ぬばかりだ」と思う。後で達二の兄が迷子になつた場所を祖父から聞かされて、「笹長根の下り口だ」と答えると、祖父は「危いがつた。危いがつた。向ふさ降りだらそれつ切りだつた」と言う。この場面を漱石『夢十夜』の「第五夜」とあわせて読んでみよう。

此の時女は、裏の櫓の木に繋いである、白い馬を引き出した。(中略)馬は蹄の音が宙で鳴る程早く飛んで来る。

(中略)

すると真闇な道の傍で、忽ちこけこつこうと云ふ鶏の声がした。女は身を空様に、両手に握つた手綱をうんと控へた。馬は前足の蹄を堅い岩の上に発矢と刻み込んだ。こけこつこうと鶏がまた一声鳴いた。

女はあつと云つて、緊めた手綱を一度に緩めた。馬は諸膝を折る。乗つた人と共に真向へ前へのめつた。岩の下は深い淵であつた。

蹄の跡はいまだに岩の上に残つてゐる。鶏の鳴く真似をしたものは天探女である。此の蹄の痕の岩に刻みつけられてゐる間、天探女は自分の敵である。⁽¹²⁾

ここで女は櫓の木に繋ぎ止めていた馬に乗り、敵の大將に捕まえられた主人公の元に急ぐが、天探女が鶏の鳴き真似をしたため、そのまま深い淵に馬ごと落ちてしまう。引用箇所の後では、馬の「蹄の跡」と「蹄の痕」という二種類の書き方がなされているが、注目すべきなのは馬の「蹄の痕」と書いてあることである。谷の下に落ちてしまう場面は、「種山ヶ原」において、主人公が牛を追いながら「沢山馬の蹄の痕で出来上つてゐた」黒い道のところで危うく「笹長根の下り口」に落ちてしまひそうになるという場面と極めてよく似ている。したがって、両テキストにおいては「櫓の木」が登場し、「馬の蹄の痕」、「谷からの墜落」といった共通のイメージがあることがわかる。

何故、漱石テキストにおいて「墜落」と「死」の表象として「櫓の木」を登場させるかというと、明治三六年五月二二日、「櫓の木」に「巖頭之感」⁽¹³⁾を遺言として刻んで残し、日光の華厳滝に入水自殺をした藤村操が想起される。藤村の自殺の原因には諸説があるが、一説では自殺を図る直前に、第一高等学校の英語の授業で漱石から叱られたからだとされている。⁽¹⁴⁾ 漱

石はその後、藤村の自殺事件を思わせる文章を『吾輩は猫である』⁽¹⁵⁾と『草枕』(『新小説』明治三九年九月)⁽¹⁶⁾において書いている。『吾輩は猫である』における「巖頭の吟でも書いて華厳滝のたきから飛び込む」というように、藤村操の事件をパロディ化して書かれた「十」の巻においては、主人公の姪にあたる「奇麗な名のお嬢さん」の「雪江」が、主人公の留守中に家を探ねてくる場面がある。雪江が叔父の性格について、「天探女^{あまひやく}でせう。叔父さんはあれが道楽なのよ」⁽¹⁷⁾と文句を言う場面では、「あまのじゃく」に「天探女」という漢字が当てられている。これは『夢十夜』の「第五夜」の最後の場面で登場する、鶏の鳴き真似をして女を谷へと墜落させた「天探女^{あまひやく}」の場合と同じ漢字の使い方をしている。また、雪江が「天探女」な性格の叔父に対し、自分から蝙蝠傘はいらないという場面があり、その後に「巖頭の吟」への言及がある。この箇所は藤村操の自殺後に、藤村の叔父の「那珂通世」が五月二六日の「万朝報」において操に対する哀悼文を掲載し、「華厳の上下を隈なく探したれば、瀑の落口の上なる巨岩の上に蝙蝠傘を植てるあり」⁽¹⁸⁾と書いているのと呼応している。

漱石『夢十夜』の「第五夜」に話を戻すと、テキストの最後に、「蹄の跡はいまだに岩の上に残つて居る」「此の蹄の痕の岩に刻みつけられてゐる間、天探女は自分の敵である」(漱石『全集第十二巻』一一五頁)とあるのは、漱石の教え子である藤村操が九七メートルもある「華厳滝」から飛び降り自殺をし、その遺言を「櫓の木」に刻み込んだことを連想させる。また、「第

「五夜」において、「女」を馬とともに谷から落としたのは「天探女」であり、漢字通りに解釈すれば、神代の出来事が記録されたとされる太朝臣安萬侶編纂『古事記』（和銅五年）や舍人親王編纂総裁『日本書紀』（奈良時代成立と推定）に登場する神「天探女」が踏まえられているだろう。⁽⁹⁾ 神話における天探女と天稚彦の関係性に注目することで、漱石『夢十夜』の「第五夜」において、敵の生け捕りになった「自分」と「天探女」の関係性も明瞭になるだろう。その一方で、「天探女」という漢字に振られてある「あまのじゃく」というルビに注目すると、異なる解釈ができることがわかる。小林康夫は「第五夜」について、「それは、あくまでも天探女、つまり天邪鬼の物語であって、ある意味ではそうしたみずからの心の振れこそが、ここで夢の物語を通して尋ねあてられていたもの」であり、「古事記などの神話世界のフィギュールに重ね合わせる必要はないだろう」と論じ⁽²⁰⁾ 伝説的な要素を否定している。一方で、竹盛天雄は、「天探女」という漢字と「あまのじゃく」というルビがそれぞれ異なった意味を生成するダブル・ミーニングについて、これが「イロニーの申し子、その具体化された機制である」とし、テクストの「パラドックス」を生成する機制として「天探女」という説話的なモチーフが必要とされたと指摘している。⁽²¹⁾ 漱石の授業で叱られたために藤村が自殺をしたという説を踏まえていると、「第五夜」における「天探女」によって「女」が谷から墜落する場面も、藤村が自身の「あまのじゃく」が原因で滝から飛び降りたことをパロディ化しているものと考えられ

る。このように、「第五夜」においては漢字とルビの使い分けが行われており、それがダブル・ミーニングを生じさせていることがわかる。このように、「第五夜」における「櫓の木」が「墜落」と「死」の表象になっていることがわかる。

次に、賢治テクストにおける「櫓の木」の表象について考えてみたい。「種山ヶ原」から転用された童話「風の又三郎」の「九月四日」の章においてもやはり子供が迷子になる場面が描かれている。迷子になった嘉助が一郎の兄と再会する場面においては、「一郎の兄さんは馬を櫓の木につな」（『新校本 第十一巻』一九四頁）いだとある。もう一つ「種山ヶ原」のプレテクストと見なされている賢治「さるのこしかけ」には、「櫓夫は夕方、裏の大きな栗の木の下に行きました。其の幹の、丁度櫓夫の目位高い所に、白いきのこが三つできてゐました。まん中のは大きく、両がはの二つはずっと小さく、そして少し低い」（『新校本 第八巻』九〇頁）とある。「小猿の大將」に案内されて、櫓夫が樹の幹の中の階段を上へ駆けのぼり、小猿たちに胴上げされて高い所から落とされてしまうが、山男に受け止められて、助かる。上述した二つのテクストにおいて「櫓の木」、「櫓夫」といったように、「櫓」が用いられた言葉に「墜落」のイメージがあることがわかる。更にそれだけではなく、「ひかりの素足」では、一郎と櫓夫の兄弟が父親のいる山小屋から、母親のいる平地の家に戻る途中の吹雪の中で、櫓夫だけが死んでしまう。「種山ヶ原」の場合、主人公の達二があと少しで「笹長根」の向こうに落ちてしまいそうになる。そして倒れた際に夢の中で、

櫓夫が「綺麗な子供ら」と東北に伝わる踊りである「剣舞」を踊っていたり、教室にいたりする夢を見る。その夢の中では、夏休みのあいだに何をしていたのかと教室で先生に質問され、剣舞を踊っていたと櫓夫が答える場面がある。教室の夢から目覚めた達二は次に、「櫓の木のうちからまつ赤な顔」を出した「山男」と出会う夢を見る。これらのテクストにおいて、「櫓夫」の名前を持つ登場人物が「墜落」と「死」「恐怖」「異人」のイメージを有していることがわかる。賢治の童話「谷」（生前未発表）の冒頭において、「櫓ならわたり渡のこの崖はまつ赤でした」「のぞいて見ると全くくるくるする」「私はまるで頭がしいんとなるやうに思ひました。そんなにその崖が恐ろしく見えた」（『新校本 第九巻』一〇四―一〇六頁）とある。回想形式で語られるこのテクストの中で、「私」が谷に対して抱いている恐ろしい感覚が全編を貫いており、「霧のあるときは谷の底はまつ白でなんにも見え」ないという箇所は、「種山ヶ原」の達二が迷子になった際に見る風景が「向ふの方は底知れずの谷のやうに、霧の中に消えてゐる」（『新校本 第八巻』一〇一頁）という箇所と呼応していることがわかる。ここから、「種山ヶ原」で描かれている達二の死に対する恐怖と、「谷」において「私」が「櫓渡のこの崖」という赤色の谷に対して抱いている恐怖が共通しており、「櫓渡」という賢治が創作した谷の名前の設定もまた、「死」を連想させる地獄の「奈落を渡る」という意味から取られているのではないかと考えられる。「種山ヶ原」において、主人公の兄弟の名前が、「一郎」と「達二」という兄弟ら

しい名前であるのに対し、「ひかりの素足」に登場する兄弟の主人公の名前は、兄弟らしくない「二郎」と「櫓夫」という名前である。「ひかりの素足」の原稿推敲の段階では、一郎の名前が「一郎↓ペル↓ペルン↓一郎」へと変っており、櫓夫の名前が「櫓夫↓ゼル↓ペル↓櫓夫」⁽²²⁾へと変っていることから、このテクストもやはり『グリム童話』の「ヘンゼルとグレーテル」（KHM15: "Hänsel und Gretel"）を下敷きにしており、「ヘンゼルとグレーテル」の兄の名前「ヘンゼル」から「ひかりの素足」の兄弟の名前がつけられたのではないかと考えられる。しかし、「ペル」（ペルン）と「ゼル」の兄弟の名前が、「一郎」と「櫓夫」という日本人の名前に変る際に、兄の名前が長男を思わせる「一郎」であるのに対し、弟の名前が「櫓夫」であるのは突飛な印象を与える。「櫓夫」の名前について考える際に、賢治テクストにおいて、共通して「櫓」という字が含まれた名前に死のイメージが付与されているのではないかと考えられる。

三、漱石と宮沢賢治の文学における「篝火」の表象

続いて、漱石『夢十夜』の「第五夜」において繰り返し登場する「篝火」という言葉に注目してみたい。石原千秋は、漱石の『夢十夜』について、「次の刻」までに「無」を悟らねばならない「第二夜」の課題と、「鶏が鳴る迄」に〈無限〉の距離を走らねばならない「第五夜」の課題もまだ酷似している」と指摘し、「女は、「櫓の木」から「篝のある所迄」の距離を走る

ことといい、「岩の下」の「深い淵」に落ちることといい、常に空間的に男から遠いのであり、一方男は、それを時間的に待つ時間的存在としてあり続ける（中略）このように相反する存在様態を持つ女と男とを結ぶのは、意外にも〈死〉なのである」とし、「第五夜」では確実に〈死〉が暗示されていると述べている。⁽²³⁾そして、「女と「自分」との関係係を「恋」だと規定した男の恨みが、物語が空間的に措定した他界を身体化し、〈死〉に見せるのである。「恋」という男の〈感情〉が、空間的に現れた他者を〈死〉に変容させたのだと言い換えてもよい」と指摘している（傍点石原、一二二頁）。ここからは石原の指摘している「櫓の木」から「篝火のある所迄」の距離をめぐって、賢治テクストと漱石テクストの関連性について論じていきたい。

「第五夜」において、女が走るのには「櫓の木」から「篝火のある所迄」であり、ここではテクストに「大將は篝火で自分の顔を見て」「大將は腰を掛けた儘、篝火を眺めてゐる」「時々篝火が崩れる音がする」とあるように、「篝火」への言及が頻出している。小林康夫によれば、「第五夜」の「自分」の恋はまるで「篝火」のように燃えさかっているという。

「神代に近い昔」という時間設定があり、「自分が軍をして運悪く敗北した為に、生擒になって、敵の大將の前に引き据ゑられた」。自分は草の上に座り、篝火をはさんで敵の大將軍の上に立ち、そこで大將が「死ぬか生きるか」と聞く。自分は「死ぬ」と答える。すなわち、自

分は死を——時間的にも、おそらく空間的にも——前にしている、死を引き受けているという状況である。（中略）戀とは、死を前にして、なおかつ、来るのだらうか？と切迫して願ひ欲望するその待機と期待の激しさにほかならない。（中略）まさに自分と敵の大將の向かい合いのただ中で燃えさかる篝火の激しさに等しい。⁽²⁴⁾

自分の恋を「篝火」として表現した例として、『源氏物語』（紫式部、寛弘五年、全五四帖）の第二七帖「篝火」における光源氏を挙げることができる。源氏が、養女として引き取った玉鬘に恋心を抱き、その玉鬘に源氏が贈った歌「篝火にたちそふ恋のけぶりこそ世にはたえせぬほのをなりけれ／いつまでとかや、ふすぶるならでも、苦しき下燃えなりけり」⁽²⁵⁾から「篝火」という章題が付けられている。また、「玉鬘」の母親である「夕顔」が登場する第四帖においては、「立ちさまよふらむ下つ方思ひやるに、あながちに丈高き心地ぞする。いかなる者の集へるならむと様変はりておぼさる」⁽²⁶⁾とあり、この箇所は与謝野晶子による現代語訳では、高い窓に顔が当たっているその人たちは、ひじように背の高いもののように思われてならない」⁽²⁷⁾となっている。したがって漱石『夢十夜』の「第五夜」において、「其の頃の人はみんな脊が高かった」とあり、「其の頃でも恋はあった」とあるのは、「第五夜」が平安時代の貴族たちの恋愛物語である光源氏と玉鬘の恋をパロディ化していることを示し、「篝火」という言葉が頻出しているのは、『源氏物語』の「篝

火」に由来しているのではないかと考えられる。つまり、漱石『夢十夜』の「第五夜」には、「天探女」の民間伝承が背景にあると同時に、「自分」と「女」の恋では、「源氏物語」の第二帖「篝火」における「光源氏」とその養女である「玉鬘」の恋がパロディ化されていると考えてもよいだろう。

次に賢治の場合を見てみよう。「種山ヶ原」においては、「篝火」という言葉は用いられてはいないが、「篝火」を思わせるイメージが描かれている。主人公、達二が夏休みを回顧するシーンにおいては、「町のまっ赤な門火の中で、刀をギラギラやらかしたんだ」（『新校本』第八巻、九七頁）とある。この「門火」とは、盂蘭盆のときに死者の靈魂を迎え送るために門前で焚く火のことを指し、迎え火と送り火を意味しており⁽²⁸⁾、この言葉の持つイメージが篝火とよく似ていることがわかる。これだけでなく、物語の途中で達二が迷子になった際に見る恐ろしい夢においては、「町はづれの町長のうちでは、まだ門火を燃やして居ませんでした。その水松樹の垣に囲まれた、暗い庭先にみんな這入って行」（前掲書、一〇三頁）つたとある。現実には達二が見た光景（夏休みを回顧する場面）においては、町で門火が燃やされているのに対し、夢の中ではなぜか町外れの町長の家においてだけは、門火が「まだ」燃やされてはいない。その後、兄によつて助けられた達二は祖父の元に帰るが、その際に出迎えに来る祖父は「霧の中に立ってゐ」て、「おゝ達二。寒がべあ、さあ入れ。」と言うが、その祖父が達二たちを招き入れる場所については、「半分に焼けた大きな栗の木の根もとに、草

で作った小さな囲ひがあつて、チヨロチヨロ赤い火が燃えてゐ」（前掲書、一〇九頁）たとある。ここにおいても、「篝火」という言葉は登場しないものの、「草で作った小さな囲ひ」があり、チヨロチヨロ火が燃えてゐるという描写はまさに「篝火」そのものである。そしてその直後に「兄さんは牛を櫓の木につなぎました。／馬もひひんと鳴いてゐます」とあるが、「篝火」への言及および馬を繋ぎ止める「櫓の木」への言及は、漱石『夢十夜』の「第五夜」の「裏の櫓の木に繋いである、白い馬」と、「女に闇の中に尾を曳いた。それでもまだ篝のある所迄」という表現と呼応している。「種山ヶ原」から転用された「風の又三郎」においては、兄が櫓の木に繋ぎ止めたのが「牛」から「馬」に書き換えられており、さらに漱石の「第五夜」との類似性が増している。

そして、「種山ヶ原」には、「篝火」という言葉が登場していない代わりに、関連作品の詩編「原体剣舞連」（詩集『春と修羅』所収、関根書店、大正一三年四月）には「櫓」と「篝」の両方の言葉への言及があることに注目したい。「種山ヶ原」では、達二が夏休み中に櫓夫らと一緒に東北に伝わる民俗的舞踊の「剣舞」を踊ったことを思い出す場面では、「むかし 達谷の 悪路王、／まつくらあくらの二里の洞、／渡るは 夢と 黒夜神、／首は刻まれ 朱桶に埋もれ」（『新校本 第八巻』九七頁）とある。この箇所は、詩「原体剣舞連」における「むかし達谷の悪路王／まつくらくらの二里の洞／わたるは夢と黒夜神／首は刻まれ漬けられ」（『新校本 第二巻』一〇八頁）という箇所と語句がほぼ重

なっている。そして、「種山ヶ原」の冒頭にある「種山ヶ原といふのは北上山地のまん中の高原で、青黒いつるつるの蛇紋岩や、硬い橄欖岩からできてゐます」（九六頁）とあるのもやはり「原体剣舞連」の「櫓」とのうれひをあつめ／蛇紋山地に篝をかかげ」（二〇七頁）という表現と重なっており、ここでもやはり「櫓」が登場し、同じブナ科の落葉高木である「櫓」も登場している。このように、同じような描写が重複していることから「種山ヶ原」に登場する「剣舞」の場面が詩編「原体剣舞連」から転用されていることがわかる。「原体剣舞連」にある「櫓と掬とのうれひをあつめ／蛇紋山地に篝をかかげ」の箇所が、漱石『夢十夜』の「第五夜」にある「櫓の木」と「篝のある所迄」という言葉と対応していることがわかる。

また、漱石テクストにおける「篝火」の表象と賢治テクストにおける「篝火」の表象の差異も看過できない問題である。漱石「第五夜」の場合は、「自分」の「一目思ふ女」に対する気持ちの高揚と呼応して「すると誰やら来て、新しい枝を沢山火の中へ抛げ込んで行く。しばらくすると、火がばち／＼と鳴る」（『漱石全集 第十二巻』一一四頁）とあるように激しく燃えており、ここでの「篝火」の描かれ方が、『源氏物語』の「篝火」における、玉鬘に対する光源氏の恋心と重なっていることがわかる。「篝火」が「恋の炎」を表象しているのみならず、同時にそれは「戦火」の表象でもあり、天探女によって邪魔をされることで、駆けつけることのできない女への恋は敗北を意味する。

一方で、賢治「種山ヶ原」においては、「篝火」という言葉

が登場しないかわりに、「剣舞」が行われる際に「篝火」を思わせる火のイメージが描かれている。具体的には、村の人々が家ごとに「門火」が掲げ、また、主人公である達二の夢の中では、灯されるはずの「門火」が町長の家だけは灯されないというエピソードが挿入されており、達二が夢から目覚めると、その時まで剣舞の祭りが行われていたかのように、「チヨロチヨロ赤い火が燃えて」とある。つまり、「剣舞」と「門火」が登場する達二の夢では、伝承人物である「悪路王」の戦いが潜んでいるのだ。そして、その夢に登場する「門火」は戦争のイメージを表象する「篝火」と同様の役割を担っていることがわかる。漱石「第五夜」と賢治「種山ヶ原」の両テクストにおいて、「篝火／門火」が戦争における「敗北」の表象となっているのだ。

四、宮沢賢治文学における「民俗的要素」と「複数性」の問題

賢治「種山ヶ原」と漱石『夢十夜』の「第五夜」では共通して「櫓の木」が描かれており、墜落のモチーフや馬の蹄の痕の描写があることからして、両テクストは相似性が高いと言える。また、一方では「剣舞」にまつわるアイヌ文化の起源である「悪路王」伝説が背景にあり、一方では「天稚彦」と「天探女」にちなんだ伝説が背景にあり、両テクストともに伝説とその起源をもとにしているのである。本稿の冒頭で述べたように、宮沢賢治と柳田國男のテクストについては、地政学的な類似性、

及び創作時期の類似性があるという点から、両者はしばしば比較されてきた。この点について、吉田文憲は「民俗学という学問自体が近代化によって減びてゆく前近代との亀裂や葛藤の中から見いだされた、いわば大正期の学問であることを考えれば、同じ時代の弱者や減び行く風景に目を留め、それらに敏感に反応するところに自らの詩や童話を紡ぎ出した賢治作品が柳田国男と重なり合うのは時代の方から必然のまなざし」があると述べている。そして、柳田が昭和期に入ると、「常民」という言葉をキーワードにして家や稲作、祖霊信仰を核とした国民俗学の方角へと急速に傾斜していく一方で、賢治テクストには人類、あるいは生きものの発生史にまで遡行するような壮大なヴィジョンがあり、旧約聖書や創世記のような世界もテクストに登場しており、民俗学に収斂されないモチーフがあると指摘している⁽³⁰⁾。赤坂憲雄によれば、柳田の稲作一元論の理論を支えた「古代蝦夷の末裔たちがどこかへ消え」、「東北のいまを生きる人々は、そのすべてが中世の南からの移住者の子孫である」という山人論の失敗を経験した柳田は、東北の歴史や文化のありようを巧妙に隠蔽して捨象しており、その東北像には「先験的な観念の紡ぎだす倒錯的イメージ」があるとし、東北像を身体感覚で掴んでいる賢治テクストとは対立する構図があるという⁽³⁰⁾。

天沢退二郎は、「雁の童子」は賢治の「西域物」の中で最も完成度の高い作品であり、それを最後の赤インクの手入れによる成果であるとし、「この手入れ以前は全体が往古の伝承だったのを、祠が「全くあたらしくし」、「この頃あつた昔はなし」

「このごろ降りられました天童子」というぐらいに書き直したのはすべて赤インクである。これはあの柳田国男『遠野物語』の怪異や奇譚がすべて、ぐく最近あつたことであることが強調されているのと、軌を一にしていると考えられる」(傍点天沢)と指摘している⁽³¹⁾。また、賢治「とっこべとら子」(生前未発表、大正一年成立と推定)は橘不染『もりおか明治舶来づくし』併収の「怪談集」に由来するとされているが⁽³²⁾、石井正己は、賢治の「とっこべとら子」の冒頭に「おとら狐のはなしは、どなたもよくご存じでせう」とあるのは、柳田と早川孝太郎の共著『おとら狐の話』(玄文社、大正九年二月)を踏まえての言葉だと指摘している⁽³³⁾。そして、石井によれば、賢治「とっこべとら子」にある「私の知つてゐるのは、「とっこべ、とら子。」といふのです」という箇所は、柳田らの『おとら狐の話』を受けて書かれており、テクストに登場するいくつかのエピソードが岩手県の昔話の類話にはないことから、賢治「とっこべとら子」が「伝承を装つて書かれた童話だった」という。また、このテクストの前半には「昔のこと」と書いてある一方で、後半には「ゆふべ起きたこと」とあることについては、「後半の昨夜の出来事でさえ「偽の方の話」なのだから、前半の昔の出来事も「多分偽ではないでせう」という描かれ方が、「柳田『おとら狐の話』で行つた研究に対する批判さえ孕んでいる」という。また、賢治「ペンネンネンネン・ネネムの伝記」(生前未発表、大正一〇、一一年に成立と推定)に「ザシキワラシ」が登場する場面において、「日本岩手県上閉伊郡青笹村字瀬戸二十一番戸伊藤万太

の長男千太、八歳を氣絶せしめたる件」というくだりがあるのは明らかに佐々木喜善『奥州のザシキワラシの話』（玄文社、大正九年二月）を踏まえたからであると考え、大正一五年に『月曜』第二号に掲載された賢治「ざしき童子のはなし」の冒頭に「ぼくらの方の、ざしき童子のはなしです」とあるのも柳田や佐々木らの遠野のザシキワラシを意識しているからだとい³⁴う。このように、賢治童話に見られる民俗学的な要素と柳田の民俗学との間の齟齬は、しばしば先行研究でも論じられているのだ。

益田勝実⁽³⁵⁾は宮沢賢治文学に「民話ばなれ」の傾向があると指摘しており、それを受けて石井正己は、『遠野物語』や昔話集は書き手の意思を抑圧して、人々が語り伝えた伝承を忠実に記録しようとするものだったが、賢治の童話は「伝承の復活や再現」ではなく、芸術まで高めている⁽³⁶⁾と述べている。しかし、賢治の童話が「芸術」まで高められていると言うのであれば、近代以降に民俗学研究という新しい学問を作り上げた柳田国男もまた、民俗学的なものを「芸術」にまで高めているのではあるまいか。前述したように、石井は、賢治「とつこべとら子」が柳田らの『おとら狐の話』を受け、「伝承を装って書かれた童話だった」と述べているが、ここで重要なのは、賢治と柳田のテキストにおいて、民俗学的なものの表象に差異があるということである。つまり、賢治のテキストにおける民族的な要素は、柳田の系統的な民俗学には還元不可能なのであり、そこには民俗学の体系には収まりきらずにこぼれ落ちるものがあるのだ。それは賢治テキストに常に「複数性」の問題があるか

らである。

このような「複数性」は、賢治テキストにおける民俗的な要素のみならず、同時に賢治テキスト全体にも見いだされる。例えば「銀河鉄道の夜」（生前未発表）には大まかに言って四段階の改稿が認められている。「グスコープドリの伝記」（『児童文学』第二冊、文教書院、昭和七年三月）においては改作される度に内容が大きく変わっており、その初稿と見なされている「ペンネンネンネン・ネネムの伝記」（大正一〇・一一年成立と推定、生前未発表）とはプロットに大きな差異がある。更にもう一つの例を挙げよう。『春と修羅』第二集（生前未発表）に収録されている「一八四 春」には「赤縞のずぼんをはいた老楽長が」という一節がある。この一節について、賢治の友人、森佐一宛書簡に賢治は、「赤縞のずぼんをはいたといふところは本統は^{ママ}萎びて黄いろな老楽長 といふのです⁽³⁷⁾」と書いており、ここから賢治が一つのテキストを創作する際に、その異稿の存在を想定していることがわかる。また、親友の保坂嘉内宛の「書簡38」においては「アオイ山ノナミ、（ユケドモユケドモ）雲ハシハヨツクリ山ヨツクリ、人ハマナコヲトヂテアラハレル木立水ヲ「マコトノ世界トヒトシカラズヤ」トカナシンデ行キマス。世界ノAモ、世界ノAモ均シク寂カナ秋ニナリマシタ⁽³⁸⁾」とあり、ここでもやはり現実とは異なつた空間が同時に存在することが示唆されている。

このように、ある一つのテキストが生成される際に、無数の異稿が再生産され、その過程で、元のテキストには還元不可能

なテキストが生成されるのである。このような賢治の創作における「複数性」の問題から、賢治テキストにおける民俗学的な要素を、単純に柳田國男の民俗学に還元することはそもそも不可能なのではないだろうか。賢治テキストには体系化を拒む複数性があるのである。

五、漱石と宮沢賢治の文学における民俗学を受容

夏目漱石は英文学者であり、そのテキストの随所にイギリス文学の影響があることは、多くの先行研究で論じられている。

そのため、農学者でありながら童話や詩を創作していた宮沢賢治には、漱石との接点はそれほどありそうもないように見えるが、先行研究でも論じられているように、漱石テキストと賢治テキストにはいくつかの類似点が見いだされる。本論文においては、漱石『夢十夜』の「第五夜」と賢治『種山ヶ原』を比較し、両テキストにおいて共通して「櫓の木」が登場し、「馬の蹄の痕」、「谷からの墜落」といった共通のモチーフがあることを論じた。さらに賢治テキストに「櫓夫」という名前の登場人物や「櫓の木」が描かれていることをきっかけにして、その関連作品である「ひかりの素足」「風の又三郎」「さるのこしかけ」「谷」といったテキストの底流に潜んでいる、死に対する恐怖について論じた。また、漱石『夢十夜』の「第五夜」に「神代に近い昔と思はれる」「其の頃の人」「其の頃の習慣」という表現があり、「天探女」が登場していることから、このテキスト

において『古事記』や『日本書紀』に登場する「天探女」の伝説が下敷きにされていることがわかる。一方で賢治『種山ヶ原』において、「むかし 達谷の 悪路王、／まつくらあくらの二里の洞、／渡るは 夢と 黒夜神、／首は刻まれ 朱桶に埋もれ」とあることから、主人公の達二と櫓夫が踊る「剣舞」の背景には、「アイヌ」文化の起源にまつわる「悪路王」の伝説があることがわかった。「種山ヶ原」はのちに「風の又三郎」に転用され、その「風の又三郎」が東北地方の伝承人物であることを踏まえると、「種山ヶ原」が極めて民俗学的な要素が濃いテキストであることがわかる。

このように、漱石テキストと賢治テキストの両方において、民俗学的な要素が認められながらも、民俗学的な要素の受容の差異から、両者のテキストがそれぞれ異なる様相を呈していることは看過できない。漱石の場合、「第五夜」において「天探女」を登場させながらも、伝説における「アメノザクメ」という読み方ではなく、「あまのじゃく」とルビを振るることによって、この言葉が伝説上の「アメノザクメ」の意味と、「ひねくれ」「捩れ」を意味する「あまのじゃく」の意味のダブル・ミーニングを有するようになっていくことがわかる。それは物語に多様な解釈を与えることに繋がっていると言ってもよい。

一方、賢治『種山ヶ原』においては、東北地方の盆に行われる伝統舞踊の「剣舞」という民俗学的な要素が描かれながらも、そこには「悪路王」と征夷大將軍の戦いの伝説をもとにして書き加えがなされており、賢治独自の「剣舞」になり得ている。

このように、民俗学的な要素だけでなく、更にほかの要素も付け加えることによって、賢治の民俗学的なテクストは、柳田国男や佐々木喜善といった民俗学者のテクストとは異なるものになっていることがわかる。賢治テクストには、柳田や佐々木の民俗学には還元できない「ぼくらの」「私の」東北観があるのである。

※本稿は中華民国児童文學學會「宮澤賢治及其文學學術研討會」（於・台北

・洪建全教育文化基金會敏隆講堂、平成二八年八月二七日）における口頭発表「宮澤賢治〈種山之原〉與夏目漱石《夢十夜》——「櫓木」、「篝火」與民俗學的受容」（宮沢賢治「種山ヶ原」と夏目漱石『夢十夜』——「櫓の木」、「篝火」、民俗学の受容）に加筆・修正を加えたものである。

学会では、邱各容先生（中華民国児童文學學會理事長）やコメンテーターを担当して下さった游珮芸先生（國立台東大學児童文學研究所所長）や会場のスタッフの方々に記して感謝する。

※宮沢賢治テクストの引用は、『新校本宮澤賢治全集』（筑摩書房、平成七年五月〜平成二一年三月）に拠るものである。年譜事項も同全集に拠る。

引用にさいしては、『新校本 巻号』と略記する。傍線、傍点などは断りのないかぎり全て論者（頼）が施したものである。

※年代の表記については、賢治の生きた時代の通例および書誌表記の便宜を鑑みて全て元号による表記で統一する。

【注記】

1 恩田逸夫「市蔵という名前——宮沢賢治の命名意識」（『宮沢賢治論』3

童話研究・他』東京書籍、昭和五六年一〇月）一三六頁（初出『国文学解釈と鑑賞』第一三巻第二号、昭和四二年一二月）

2 続橋達雄「百合を掘る」（『宮沢賢治・童話の軌跡』桜楓社、昭和五三年一〇月）一八七頁（初出『啄木と賢治』第五、六合併号、昭和五一年一月）

3 高橋世織『宮澤賢治イーハトヴ学事典』（天沢退二郎、金子務、鈴木貞美編、弘文堂、平成二三年二月）五一七頁。ここでは金田家の猫を想起させると述べられているが、漱石「吾輩は猫である」の「吾輩」は文明中学校の英語教師である「珍野苦沙弥」の飼ひ猫で、「金田」は珍野家の近所にある成金の実業家の家のことである。高橋が指摘している「金田の猫」というのは、「吾輩」が時折金田家を出入りしていることを指しているであろう。

4 高橋世織「櫓ノ木大学士の野宿」——『夢十夜』に触れつつ——（『国文学解釈と鑑賞』特集宮沢賢治——詩と童話』第五一卷第一二号、昭和六一年一二月）一三四〜一三五頁

5 相原和邦『夢十夜』試論——第三夜の背景——（『日本近代文学』第二三号、昭和五一年一〇月）

6 鈴木覺雄『夢十夜』における民俗的要因」（『藝文研究』第三九号、昭和五五年二月号）五五〜七〇頁

7 金子民雄によれば、「瀬川から直線距離にして北に役十キロ、ここに同じく西の山地からやはり小さな山流が北上川に注いでいる。葛丸川である。（中略）この山流の最上流部に青ノ木森が聳えている。「櫓ノ木大学士の野宿」の初期形「青木大学士の野宿」のヒントと思われる山である（『イーハトヴの地図をめぐる』『絵本』第五巻第九号、すばる書房、

昭和五二年七月、二五頁)

8 前掲高橋、一三四頁

9 小松和彦『宮澤賢治イーハトヴ学事典』七四〇七五頁

10 島尾敏雄「宮澤賢治文学紀行／奥六郡の中の賢治」(島尾敏雄、真壁仁

『人と文学シリーズ』現代日本文学アルバム 宮澤賢治』学習研究社、昭和五五年五月) 九八頁

11 川村湊『宮澤賢治イーハトヴ学事典』四六九頁

12 夏目漱石『夢十夜』(『漱石全集 第十二卷』岩波書店、平成六年一月二) 一一四〜一一五頁

13 悠々たる哉天壤、／遼々たる哉古今、／五尺の小軀を以て比大をはからむとす、／ホレーシヨの哲學竟に何等のオソリチーを價するものぞ、／萬有の真相は唯だ一言にして悉す、曰く「不可解」。／我この恨を懷いて煩悶、終に死を決するに至る。／既に巖頭に立つに及んで、／胸中何等の不安あるなし。／始めて知る、／大なる悲觀は大なる樂觀に一致するを。(『朝日クロニクル二〇世紀』第一卷、朝日新聞社、平成一二年一月)

14 江藤淳「文科大学講師」(『漱石とその時代』新潮社、昭和四五年八月) 二二三頁

15 『吾輩は猫である』の「十」においては、「打ちやつて置くと巖頭の吟でも書いて華嚴滝から飛び込むかも知れない」とある(『漱石全集 第一卷』岩波書店、平成六年三月、四七一頁)

16 『草枕』の「十二」においては、「昔し巖頭の吟を遺して、五十丈の飛瀑を直下して急湍に赴いた青年がある。余の視るところにては、彼の青年は美の一字の爲めに、捨つべからざる命を捨てたるものと思ふ。死其物

は洵に壮烈である、只其死を促すの動機に至つては解し難い。去れども死其物の壮烈をだに體し得ざるものが、如何にして藤村子の所作を嗤ひ得べき。彼等は壮烈の最後を遂ぐるの情趣を味ひ得ざるが故に、たとひ正當の事情のもとにも、到底壮烈の最後を遂げ得べからざる制限ある點に於て、藤村子よりは人格として劣等であるから、嗤ふ權利がないものと余は主張する。」とある(『漱石全集 第四卷』岩波書店、昭和五四年一月、一一一〜一二二頁)

17 「只怒るばかりぢやないのよ。人が右と云へば左、左と云へば右で、何でも人の言ふ通りにした事がない、——そりや強情ですよ」／「天探女でせう。叔父さんはあれが道楽なのよ。だから何かさせ様と思つたら、うらを云ふと、此方の思ひ通りになるのよ。此間蝙蝠傘を買つてもらふ時にも、入らない、入らないつて、態と云つたら、入らない事があるものかつて、すぐ買つて下すつたの」(『漱石全集 第一卷』四二九頁)

18 前掲江藤著書、二五四頁

19 「天探女」をめぐる伝説には、次の二つがある。その一つでは、地上にある葦原の中つ国の平定を命じられた天稚彦が、命令に逆らつて中つ国を横取りしようとしたため、天照大神と高皇産靈尊が雉の鳴女を下界に遣わし、天稚彦に「なぜ命令を果たさないのか」と問う。そのとき、天探女が天稚彦に「この鳥は鳴き声がよくない。射殺するのがよろしゅうございます」と進言し、天稚彦が鳴女を弓で射殺したという(西条勉による解説(『朝日日本歴史人物事典』朝日新聞社、平成六年一月)。もう一つの伝説では、『日本書紀』において、天つ神が派遣した雉が天探女であり、天稚彦がその雉の鳴く音が悪いので矢で射殺したのだが、その矢が天つ神の前に落ちたので、天つ神がその矢を取つて、この矢が天稚彦

- の射た矢であれば、必ず命中してほしいと祈って射返したところ、天稚彦の胸に命中して、天稚彦が死を遂げたという（次田潤「遷却崇神」『新版祝詞新講』戎光祥出版、平成二〇年五月）四七四頁。
- 20 小林康夫「篝火と蹄」（『漱石研究』第八号、翰林書房、平成九年五月）七一頁
- 21 竹盛天雄「イロニーと天探女——「夢十夜」論」（『国文学解釈と教材の研究』昭和五一年一月）八二頁
- 22 一郎と櫓夫の名前の変化については「ひかりの素足」の校異篇を参照『新校本 第八巻 童話Ⅰ 校異篇』一一七～一二一頁
- 23 石原千秋「構造分析の試み」（『テキストはまちがわかない——小説と読者の仕事』筑摩書房、平成一六年三月）一七一～一七二頁
- 24 前掲小林論文、六九～七〇頁
- 25 「庭の篝火とともに立ちのぼる煙は、いつまでも消えることのない私の思いの火のあらわれ、すなわち恋の煙なのだ」の意味である（柳井滋・室伏信助・大朝雄二等校注『源氏物語 三』岩波書店、平成七年三月、三〇頁）
- 26 柳井滋・室伏信助・大朝雄二等校注『源氏物語 一』（岩波書店、平成五年一月）一〇〇頁
- 27 与謝野晶子『日本文学全集 1 源氏物語 上巻』（河出書房、昭和四〇年七月）四七頁
- 28 小学館（平成一九年七月二日公開）『日本国語大辞典』（Japan Knowledge）
- Lib 平成二九年二月二日閲覧（<http://japanknowledge.com>）
- 29 吉田文憲『宮澤賢治イーハトヴ学事典』二〇四頁
- 30 赤坂憲雄「柳田国男、ブナの森の蔭に——稲作以前、または東北の基層文化」（『国文学 解釈と教材の研究』第三七巻第一〇月号、平成四年九月、学灯社）七一頁
- 31 天沢退二郎解説『新編 風の又三郎』（新潮社、平成元年二月）三五・三三六頁
- 32 橘不染『もりおか明治舶来づくし』併収の「怪談集」には「斗米（とこべ）とら子に馬場まつ子、石間かめ子にだまされな」とは、古い童謡なり。いずれも稲荷なり。その使の狐とて、各稲荷に附属せしものありて、これらにたぶらかされるなど戒めたり」とある（天沢退二郎解説『新修宮沢賢治全集 第八巻』筑摩書房、昭和五四年五月、二二七頁）
- 33 石井正巳『宮澤賢治イーハトヴ学事典』五〇八頁
- 34 同前、一八八頁
- 35 益田勝美「宮沢賢治と民話」（『宮沢賢治の世界』すばる書房、昭和五二年二月）
- 36 前掲石井、四七五頁
- 37 『新校本 第三巻』、一一三頁
- 38 『新校本 第十五巻』、四〇頁
- （九州大学大学院比較社会文化学府特別研究員）